

### 三 城山の鐘の音 かね

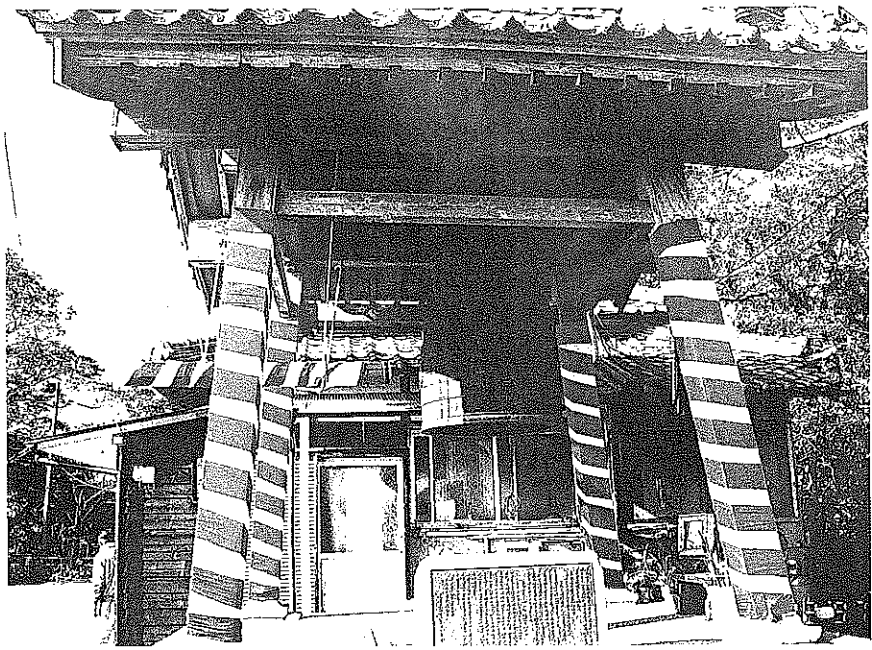
鐘が鳴るなる 城山の鐘が  
あれは三百年 時打つ鐘よ  
町の歴史を ひそめて響く ひびく  
歌人牧水幼い頃の 心愛しみ名歌を残す いと  
ヤットセ ヤットセ  
延岡七万石 城下町  
昔をしのぶ お城山  
鐘の音聞きに 来にやらんけ  
そらよーいとこせ

これは延岡市の盆踊り「ばんば踊り」の一番の歌詞です。延岡市民はもとより県北の人々に親しまれているこの歌にててくる「城山の鐘」とはどんな鐘なのでしょうか。

現在、城山で時を告げている「鐘」は、二代目の鐘になります。初代の鐘は、明暦二年（一六五六年）有馬康純が今山八幡宮に寄進した鐘でした。

この鐘が「城山の鐘」となり「時打つ鐘」となったのは、明治十一年（一八七八年）のことでした。明治十年、それ





だったかがわかります。

初代鐘守は、旧藩主・内藤政舉公のはからいで稲田藤三郎さんが、その任につきました。以来、平成八年の八月までの百十七年間、稲田家が五代にわたって鐘を撞き続け、時を知らせてきました。

まで時を知らせていた太鼓台が西南戦争で焼失したため、太鼓の代わりに時を知らせることになったのです。初代の鐘は昼夜の別なく一時間ごとに時を知らせ、昭和三十八年の二月、約八十年の長い務めを終え、内藤記念館に展示されることになりました。「ばんば踊り」の歌詞にあるように、三百年「城山の鐘」として「時打つ鐘」ではありませんが、延岡の町を見つめ続け、時を知らせ続けた鐘なのです。

また初代のこの鐘は、西南戦争、太平洋戦争と二度の戦争を生き抜いてきた鐘でもあるのです。どちらの戦争でも物資の乏しかった日本では銅製品などを集め、作りなおして武器にするということが行われていました。城山の鐘も武器に作りなおされることになっていました。しかし、西南戦争中には、市民が「鐘」を谷に落としてかくしました。また、太平洋戦争中は、「鐘」を守ろうという人々が集まり、署名活動を熱心に行い「鐘」を守りぬいたのです。

その当時の延岡の人々にとって「城山の鐘」が、どれほど大切なもの

一口に「鐘を撞く」といいますが、「時を知らせる」ということはとてもたいへんな仕事なのです。明治十一年から時を知らせ始めた鐘は、二十四時間、一時間ごとに時を知らせなくてはなりません。言いかえれば、一日二十四回鐘を撞かなくてはならなかったのです。夜もぐっすりと眠ることはできないし、一日も休むことができないのです。今の私たちの生活の中では、時間を知るにはいろいろな方法があります。しかし、その当時の人々にとっては、「城山の鐘」の音だけが、唯一、時間を知る方法だったのです。

また、「城山の鐘」はその名の通り、お城のあった山の上にあるのです。一時間ごとに鐘を撞くために、山を上り下りするわけにはいきません。そこで、鐘守の家族は、鐘とともに城山で暮らしてきたのです。鐘を撞くこともたいへんなことですが、山の上での暮らしも、また、たいへんなことなのです。山の上では井戸も掘れず、生活に必要な水も山を下り近くの井戸から汲んで、かついて上ってこなくてはなりません。食料やちよつとした買い物でも、そのたびに山を下りなければなりません。家族そろってどこかに遊びに行くこともできません。

四代目の鐘守・稲田コメさんは、大正十三年から昭和四十六年までの四十七年間鐘を撞き続けてきました。昭和四十六年三月五日正午の鐘を撞き終えた後、心不全のためになりました。生前「死ぬまで撞木(鐘を撞く木)を握り続けるぞ」と言っていたその言葉通りの最期でした。コメさんの一生はまさに、「城山の鐘」とともにあったといえます。夜も寝ずに二十四時間の時を知らせ、水をかつき上げ、火災の鐘を撞き、太平洋戦争の時には、防空壕に入々が逃げ込むのを遠くに見ながら、空襲警報の鐘を命をかけて撞いてきました。

現在の鐘守の暮しには、昔ほどの苦勞はなくなってきました。鐘を撞く時間も朝の六時から夜の八時までで一日七回とずいぶん楽になったということです。しかし、毎日朝六時から夜の八時まで

せん。時間を気にしながらの生活なのです。

「城山の鐘」は、時代の移り変わりとともにその役割も変わってきました。時を知ることが簡単にできなかつた時代には時を知らせるための唯一の方法でした。また、火災警報として、戦争中には空襲警報としての役目も果たしていました。しかし、今では火災警報は、消防署の役目です。また、分単位、秒単位で時を知ることがもてきます。さらに科学技術の進歩によって、機械仕掛けで鐘を撞くことも不可能ではな  
いでしょう。

しかし、それでも「城山の鐘」は、人の手によって撞かれているのです。

今日も「城山の鐘」は、時を告げています、代々鐘を守り続けてきた「鐘守」たちの思いをその響きの中にしのばせて。

なつかしき城山の鐘鳴りいでぬをさなかりし日聞きしごとくに

若山牧水

